

主催：同志社大学ライフリスク研究センター

情報の時代と呼ばれた今までの社会に対し、21世紀は創造性の時代といわれ、芸術がますます重要な意味を持つと考えられています。創造性の源泉としてのアートを考えるシンポジウム「アートの力」が、5月15日同志社大学寒梅館ハーディーホールで開かれました。美術番組で司会を務める姜尚中氏の講演に続き、同志社大学の河島伸子教授のコーディネートでアーティストらがアートの持つ力を議論しました。当日の様様をお届けします。
(「朝日新聞」大阪本社版 2010年6月6日付記事広告より転載)

基調講演 「感動するカー私を変えた名画」

アートから伝わる力

姜尚中 氏
(東京大学大学院情報学環教授)

私が初めてアートの力を感じたのは、旧西ドイツに留学していた29歳の時です。その年は旧ソビエトがアフガニスタンに侵攻し、テヘランでイラン革命が起きるなど大転換期でした。私は留学したのに何をしていたかわからず憂鬱に過ごしていました。そうした時、ミュンヘンの美術館で出会ったのが、ルネサンス期に活躍した画家、アルフレッド・デュラーの自画像です。

その絵は、宗教戦争など世界的に内戦や内乱が起きていた16世紀初め、破壊と絶望の時代に28歳の彼が描いたものでした。絵を見ていると「俺はここに立っている。お前はどこに立っているんだ!」と問い詰められるような不思議な体験をし、この時、自分が変わったような感覚を持ちました。アートの力とは不可解な未知との遭遇を通して人を変えることだと思います。

美術番組を担当して一番不可解だったのが、アメリカ現代美術の巨匠、マーク・ロスコが描いた抽象画です。漆黒の闇のような絵を前に私は立ち尽くしましたが、やがて自分を武装している社会的地位などの鎧がとれ、自分の一番楽しかった時代のイメージがわき、ある種の快感を得ました。不可解さやミステリアスな印象は私たちの想像力をかきたて、わからない世界に自分を預けた時に自我がなくなるのでしょう。

番組を通して感じたことは、アートを生み出す想像力は絶望から始まるということです。例えばパブロ・ピカソを突き動かしていたのは実は生と死の問題でした。限りなく死に近いところに追い込まれた状況で生まれるアートの力は大変なもので、そうした作品は私たちに限りない感動を呼び起こします。

パネルディスカッション 「創造性は経済社会発展のカギを握る」

アートは社会に問いかける

平田オリザ 氏 (劇作家・大阪大学大学院教授)
佐野元春 氏 (ミュージシャン)
岡部あおみ 氏 (武蔵野美術大学教授)

平田 劇場や美術館は多すぎる情報をいったんシャットアウトし、芸術家で作った強い世界観に触れられるところです。そこで自分の生き方などの世界観を再確認してもらうのが、アートの一つの役割だと考えます。2年前に大阪大学の先生と一緒にロボットと俳優が演じるロボット演劇の作品を作りました。私は約0.5秒のセリフの間を認知できますが、その感覚でロボットに指示を与えるとロボットは目に見えてリアルになり、その舞台を見て観客が涙しました。リアルに見せることでいえば工学者よりアーティストの方が世界観を提示できたのです。

佐野 僕は30年間ソングライティングに取り組んでいます。多くの人から「作詞、作曲は感性で作るんですよね」と聞かれますが、長年にわたっていい曲を書くには経験と技術がものをいっていると思います。僕が考える優れた歌詞は「他者への優しい眼差しがあるか」、「時代、性、国籍、年代を超えて普遍性があるか」などいくつか挙げられますが、個人的には「よいユーモアの感覚があるか」が一番大事だと考えます。よいユーモアとはある種絶望の裏返しで、人間の弱さや愚かさを認めた上でそれでも前に進もうとする感覚です。

岡部 美術展を作る立場からお話しします。世界で入場者数が5位になったのが、パリのケ・ブランリー美術館で行われたイランの写真展です。この美術館はアフリカ、中東、アジアなど非西洋の美術を中心にコレクションしています。展覧会は芸術鑑賞だけでなく、例えばイラン女性の社会進出など思想や社会情勢の認識を新たにできる機会となります。パリのポンピドゥーセンターで開催中の女性作家の作品を集めたコレクション展も社会に問いかけている展覧会です。常設展で女性作家の作品を見られるのは今でも限られていて、そこにメスを入れました。姜 本来アートは規則性や安定性を揺り動かして、私たちが知らない世界へと誘う力を持っています。一方で経済はこれまで予測可能な上に成り立っていましたが、今回のリーマンショックのように予測しなかったことが起きる。極論すると、現実がアートを超えているところがあると思います。

佐野 現実がアートを超えることは常に考えさせられます。自分の表現で複雑な現実を凌駕したいという欲望があるのでしょう。ただ、その作業は難しくなっていて、どんなに言葉やイメージを紡いでも現実に先を越される不安感があります。自分が表現を続ける上で、アーティストとしてできることを考えるのが重要だと思います。

岡部 私は阪神・淡路大震災の後、被災した建物の中で作品を制作する「阪神アートプロジェクト」を組織しました。被災した自分の周りの人たちが元気になれるプロジェクトができないかと思ったのが始まりです。建物が破壊されてすべてなくなる状況の中で、何か記憶に残したいと考えました。

平田 僕は文化による都市の再生を提案していますが、今のような経済では失職して再就職できないと引きこもったり最悪は孤独死に陥ることがあります。そんな時に社会と接点を持たせられるのが芸術です。僕の経営する劇場では雇用保険受給者に割引を始めました。芸術文化がより身近になるには、企業社会や賃金労働中心の社会を変えることだと思います。

高まる芸術の役割